九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州帝国大学留学生の郭沫若が見た「千代の松原」

岸田，憲也
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/13198

出版情報：中国文学論集. 37, pp.106-120, 2008-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

九州帝国大学留学生の郭沫若が見た「千代の松原」

岸田憲也

はじめに

昨今、ようやく郭沫若研究は熱を帯びつつあると言えるが、研究の対象は新詩が主流である。確かに、郭沫若と福岡について言及する際、名詩集『女神』を含む新詩の存在なくしては語れない。その一方で、一九五五年に訪日科学代表団団長として福岡を訪問した際には、郭沫若は多くの旧詩を書き残している。本稿は、彼の青春時代を象徴する「千代の松原[1]」を詠じた旧詩の主題を明らかにするとともに、新詩との比較から、留学生であった郭沫若が見た福岡の都市の変遷について考察しようとするものである。

一　九州大学における二つの思い出

（一）九州帝国大学留学生として

郭沫若が九州帝国大学医科分科大学に進学したのは一九一八年九月であった。[2] その後、一九二三年三月に九州帝国大学を卒業はしたものの、医学の道は断念した。むしろ留学中に文学の才能を開花させ、その後の一生を決めるきっかけを作った。

自伝「創造十年」には、箱崎の海岸での張資平との出会いに関する記述がある。[3] この出会いは文学結社「創造社」

結成の契機となり、郭沫若にとって箱崎の海岸は、終始忘れられない地となった。同時に、箱崎の海岸、当時一家が住んでいた所にあった「千代の松原」も印象的だったことが書簡からうかがえる。[4] 以下は郭沫若が両親と郁達夫にそれぞれ宛てたものである。（以下、引用詩文の日本語訳は拙訳である。）

・海岸山有蒼松萬千樹（ママ），照眼皆青，空氣甚新鮮也。[5]

海岸には青い松が数多くあり、見渡す限り青々としていて、空気も大変新鮮です。

・我的住居離海岸不遠。網屋町本是福岡市外的一所漁村。但是一方面卻與市街的延長相連接。村之南北兩端都是松原。日本人稱呼千代松原，《武備志》中稱爲十里松原的便是。海在村之西，村上有兩條街道，成丁字形，南頭一條，東西走，與海岸線成垂直。我自上前年以來，兩年之間即住在這條街道的西端，面北的一棟樓房里，樓前後都有窗，可望南北兩端的松原，可望西邊的海水。我如今卻已遷徙了，在四月中我回了上海以後，現在的住居在與海岸成平行的一條街道之中部，背海，又無樓，我看不見博多灣中變幻無常的海色，我看不見十里松原永恒不易的青翠，我是何等不滿意，對于往日的舊居何等景慕喲！[6]

うちは海岸から遠くない。網屋町はもともと福岡市郊外の漁村だった。しかし、一方で市街地とつながっている。村の南北両端とも松原がある。日本人は千代の松原と呼び、『武備志』では十里松原と呼ばれている。海は村の西にあり、村には二本の通りがあり、T字をなしている。南側の通りは東西にのびて、海岸線と垂直である。小生は一昨年から二年間、この通りの西端、北向きの二階建ての家に住んでいた。家の前も後ろも窓があるので、南北両端の松原や西側の海を見ることができた。今はもう引っ越してしまった。四月に上海に帰った後、新しいうちは海岸と平行の通りの真ん中にあり、海を背にしていて、一階建てで博多湾の変幻極まりない海の色、そして十里松原の変わらない緑を見ることができない。現状に何ら不満はないが、かつて住んでいたところを何とも懐かしく感じる！

また、九州帝国大学留学時代の郭沫若は三人の子ども（博生、和生、佛生）にも恵まれ、彼らと松原を散歩する様子が詩文にも見える。つまり、郭沫若にとって松原は文学のみならず、新しい家族の憩いの場所でもあり、松原に対する思いもひとしおであった。だからこそ、思い出の場所を何度も詩文の舞台に用いたのである。

（二）訪日科学代表団団長として

一九五五年の「訪日科学代表団」という名称は、毛沢東や周恩来、劉少奇、朱徳ら当時の多くの中央幹部が頭を悩ませて決定したものである。これは日本側の受け入れ機関である「日本学術会議」に合わせて名づけられた。[7]

当時、郭沫若は中国科学院院長、全国人民代表大会常任委員会副委員長、世界和平擁護者大会中国代表といった肩書きをも兼ねていた。郭沫若以外のメンバーは、以下のとおりである（カッコ内は専門分野）。[8]

○団員…馮乃超（教育学）、翦伯賛（歴史学）、蘇歩青（数学）、茅以昇（橋梁工学）、汪胡楨（水利工学）、馮徳培（生理学）、薛愚（薬学）、熊復（歴史学）、葛庭燧（金属物理学）、尹達（考古学）

○随員…李徳純　○通訳…劉徳有、楊貴林　○秘書…戚慕光

団員は全て新中国の各界を代表する人物であった。ここで問題となるのが、どうして日本側の受け入れ機関が日本政府ではなく、日本学術会議であったかということであるが、それは当時の政治背景と密接な関係を有する。一方、中国政府は日本政府以上に柔軟な対応を見せ、日中国交回復を心待ちにしていた。[9] いわゆる「積み重ね外交」（民間外交）[10]で、訪日科学代表団の訪日もその延長線上に位置付けられる。

このように、訪日科学代表団団長である郭沫若の身分は、新中国を代表する政治家であり、その言動ひとつひとつが日中双方から注目される立場にあった。[11] 事実、訪日前後の郭沫若は『人民日報』[12]上で何度も日本の政治批判を行なっているが、訪日期間中は封印状態にあった。ただ、「封印」というのは日本政府を意識した表向きのものであって、実際はどのようなものであったかは検討の余地があろう。

二　「千代の松原を吊（いた）む」

郭沫若が九州大学卒業後も、九大の学風や「千代の松原」、博多湾の風物を懐かしんでいたことは以下の文章からも明らかである。

我離開母校雖已經三十二年了，但我經常懷念當時的自由學術的風氣。三十二年決不是短暫的歳月，世界的形勢

經歷了巨大的變遷，但千代松原和博多灣的風光依然如在眼前。[13]

（「致九州大学教師和同学」（一九五五年五月十日））

私は母校を離れてもう三十二年の時が過ぎましたが、いつも当時の自由な学風を懐かしく思っております。三十二年は決して短い時間ではなく、世界情勢も大きく変化をいたしました。しかし、千代の松原と博多湾の風景は依然として目の前にあるようです。

「千代の松原を弔む」詩はその一連の心情を吐露したものである。（本稿末尾の［図版1］参照）

千代松原不見松　漫言巨害自微蟲　　千代の松原に　松を見ず、漫りに言ふ　巨害は　微虫に自ると。
八年烽燧生靈苦　兩彈鈾鋟井竈空　　八年の烽燧　生靈苦しみ、両弾の　鈾　鋟　井竈空し。
銅佛涅槃僧寺渺　銀沙寂寞夕陽紅　　銅仏の涅槃　僧寺は渺たり、銀沙は寂寞として　夕陽は紅し。
劇憐迷霧猶深鎖　約翰居然來自東　　劇しく憐れむ　迷霧　猶ほ深く鎖し、約　翰　居然として　東より来る。

この詩は「訪日雑詠」（のちに『駱駝集』に収録）の中に収録されている。詩題から、主題は「千代の松原」の立ち枯れに対する嘆きに置かれているように見えるが、実際は辛辣な政治批判である。

（二）一・二句目「千代松原不見松　漫言巨害自微蟲」に対する疑問

一・二句目は詩題のとおり松原の立ち枯れに対する嘆きである。その原因はマツクイムシだと言う。題注でも「千代松原在博多灣畔，一名十里松原，古松甚多。余留学福岡時，曾卜居林中。今來，古松已近絶滅，聞戰後遭蟲害所致。（千代の松原は博多湾の岸にあり、十里松原ともいい、古松が甚だ多い。私が福岡に留学していた頃、松原の中に住んでいたことがある。今、古松が絶滅に近い状況にあり、戦後害虫の被害に遭ったとのことである。）」と言っているが、ここに事実との矛盾がある。

マツクイムシの被害に対する悩みは戦後だけではなく、郭沫若が九州帝国大学留学当初から起こっていた。特に、一九二〇年秋のマツクイムシの被害は深刻で、当時の県議会でも議題になったほどである。[14] 郭沫若の九州帝国大学留学とマツクイムシの被害が一致することから、彼は一連の立ち枯れを目の当たりにしながら学生生活や文芸活動をしていたことがわかる。

以上を踏まえると、郭沫若が言う「蟲害」とは、単にマツクイムシの被害だけではなく、次に述べる政治批判を

暗示させるものではないかと考えられる。

（二）詩に込められた政治批判

一九五五年訪日時の郭沫若は、「政治家」として来日した。したがって立場上、講演では露骨な政治批判は極力控えられていた。一方、詩文には政治批判を含む文言が多く残されていて、[15] この点からも当時の彼の微妙な立場がうかがえる。「千代の松原を弔む」詩もそれに漏れず、政治批判を含んでいる。

郭沫若にとって日中戦争は辛く、悲しいものであった。家族との別れを余儀なくされたからである。[16] 三句目の「八年の烽燧 生霊苦しみ」とは日中戦争によって味わった自らの辛さや悲しさが込められている。また、その戦争を指揮した日本軍閥に対する批判も無視できない。四句目「両弾の 鈾 鈈 井竈空し」及び同句の自注「美國在日本所投原子炸彈兩枚，炸廣島者爲鈾彈，炸長崎者爲鈈彈。（アメリカが日本に投下した原爆は二つで、広島に投下したのがウラン弾、長崎に投下したのがプルトニウム弾である。）」では、日本はかつてアメリカに原爆を投下されたことを言う。しかし、戦後の日本政府はその後に及んでなおもオネスト・ジョンの日本配備[17]を容認した。つまり、日本政府の戦後アメリカ一辺倒主義とアメリカの対外政策に対する批判である。七・八句目「劇しく憐れむ 迷霧 猶ほ深く鎖し、約翰 居然として 東より来る」は更に複雑である。「迷霧」はアメリカの存在によって日中関係に進展がないことを暗示するだけでなく、それがまるで原爆投下時のきのこ雲のように不透明だという皮肉でもある。そして、題注でいう「蟲害」とはアメリカとそれに追随する戦後日本政治のことであり、「蟲」と形容する点からも、単なる「弔」みの詩とは読み取れない。

また、五句目「銅仏の涅槃 僧寺は渺たり」は戦争や時代の経過により、松原や周辺環境、政治状況等あらゆるものが大きく変化していったが、変わらないものは箱崎海岸に銀色に輝く砂浜と太陽だけだという個人的な「弔」みを示すものである。なお、実際は前述のとおり博多湾築港工事により砂浜もかなり変化していたはずである。

（三）「弔」字に込められた意味

「弔」の解釈に「問終也（終はりを問ふなり）」[18]とあり、古くから人の死を悼んだり、哀れんだりする際に用いられてきた。ここでは「千代の松原」に対しての擬人的用法と捉えられるが、同時に郭沫若が松原に対してどれほどの愛着を抱いていたかがうかがえる。では、彼が「弔（いた）」んでいたのは、「千代の松原」に対してだけなのだろうか。前述の戦後日本のアメリカ一辺倒政治を「弔（いた）」み、嘆く感情も含まれていないだろうか。これは政治家という立場からの解釈であり、一方私人としての立場からは次のような解釈も可能である。

それは過去を「弔（とむら）」うというものである。確かに、箱崎は彼の文学を語る上で重要な地である。しかし、学生時代のみならず亡命時代を含めて、日本において「支那蔑視」をはじめとした、辛辣で、過酷で、時には非人間的な体験をしている。その点から、彼は過去の自分、過去の経験との決別を示すために、詩題に「弔」を用いたと言える。つまり、この詩は公人（オフィシャル）と私人（プライベート）の境界に位置する郭沫若の心情を直接、吐露したものだと解釈すべきである。

三　九州大学文学部考古学研究室所蔵「雖不見青松　白砂心未改」

九州大学文学部考古学研究室（以下、「考古学研究室」と略）には「中山コレクション」がある。これは岡崎敬教授（一九二三―一九九〇）が考古学研究室の主任教授をされていた当時、中山平次郎（一八七一―一九五六）元医学部教授のご遺族から寄贈されたもので、歴史・考古学関係の資料が中心である。中山平次郎は郭沫若の病理学の恩師であるが、九州帝国大学在職中から歴史・考古学の研究に従事し、「九州考古学の父」との異名もある。

現在、考古学研究室には、次のように識された郭沫若直筆の色紙が残されている[19]（本稿末尾の［図版2］参照）。

雖不見青松　白沙心未改　乙未冬　郭沫若　（青松を見ずと雖も、白沙に　心　未だ改まらず。）

「乙未」は一九五五年であり、この色紙は郭沫若が中山平次郎宅を訪問した際に贈った真筆と推定できる[20]。劉徳有氏の随行記『郭沫若・日本の旅』には、郭沫若が残した松原に関する詩が他にも数首紹介されている。

（A）青松無處尋　未改白砂心（ママ）　青松　処として尋ぬる無く、未だ改めず　白砂の心。

（A’）雖不見青松　白砂心未改　　青松を見ずと雖も、白砂に　心　未だ改まらず。
（B）文章千古事　藝術萬人心　彈指卅年逝　松原無處尋　　文章　千古の事、芸術　万人の心。彈指に　卅年逝き、松原　処として尋ぬる無し。
（C）千代松原不見松　白砂寂寞夕陽紅　莫嗟蟲害深如此　尚有人魔勝過蟲　　千代の松原に　松を見ず、白砂は寂寞として　夕陽は紅し。嗟く莫れ　虫害深きこと此の如きを、尚ほ　人魔　虫に勝過る有り。
（D）霧帷縱深鎖　山影仍幢幢　白砂心不改　惜不見青松　　霧の帷　縱ひ深く鎖すも、山影　仍ほ幢幢たり。白砂に　心　改まらず、青松を見ざるを惜しむ。
（E）海上白鷗今不見　月芽初見亦嬋娟　詩情欲伴松原逝　怕看霓虹夜滿天　　海上に白鷗　今　見えず、月芽　初めて見れて亦た嬋娟たり。詩情　伴せんとするも松原逝く、怕き看る　霓虹　夜　天に満つるを。
（F）莫爲松原訴坎坷　日蓮銅像尚巍峨　劇憐塵夢深於海　攘攘熙熙所欲何　　松原の為に　坎坷を訴ふる莫れ、日蓮の銅像　尚ほ巍峨たり。劇しく憐れむ　塵夢　海よりも深きを、攘攘熙熙として欲する所は何ぞ。

詳細は次章で述べることにするが、郭沫若にとって松原は青春の象徴であった。その松原がマツクイムシなどの原因で絶滅寸前となり、それに対する「悲しみ」「嘆き」を複数にわたって詩に託したと言える。そして、集大成とでもいうべきものが「訪日雑詠」に収録された「千代の松原を弔む」詩なのである。つまり、白砂青松や博多湾を目の前にした詩興は、留学時代も一九五五年のいずれにおいても衰えていなかったのである。また、筥崎宮の神木が「筥松」であったことも関係してか、昔から多くの文学作品に見られる。その点からも、「千代の松原」は多くの文学者が詩情を誘われる地であったと言える。

以上、考古学研究室所蔵の色紙をはじめ、郭沫若は何度も「白砂に心 未だ改まらず」と言っている。しかし、前述のように、埋め立て事業の進んだ箱崎周辺の白砂が変化していないというのは考えにくい。そこで、筆者は「白砂のように美しく、澄んだ福岡の人々の心は、今も昔も変わっていない。それゆえ、福岡を心から愛しているのだ。」という解釈を試みたい。なお、色紙の二句（A）は別の二句（A’）とセットになっていたようであるが、郭沫若が中山平次郎に別の二句も贈ったかどうかは不明である。

四　九州帝国大学時代の詩に見られる「松原」

郭沫若が九州帝国大学留学中に書いた詩篇（特に新詩）には、大学や博多湾、箱崎の砂浜、「千代の松原」、周辺の自然や風物に関するものが多い。それは彼が博多湾をモチーフに創作活動を続けていたからであり、『女神』『星空』において顕著である。[21] 彼がこれほどまでに博多湾にこだわったのには大きな理由がある。その理由とは博多湾と元寇の関係である。[22] 以下に挙げるのは、「千代の松原」をテーマにした新詩の題名である。

「新月與白雲」「晩歩」「輟了課的第一點鐘里」「夜歩十里松原」「光海」「巨炮之教訓」「晨興」　（以上『女神』）
「南風」「雨後」「月下的司芬克司 ― 贈陶晶孫」「静夜」「暗夜」「石佛」　（以上『星空』）
「涙浪」　（『沫若詩集』）

このように、海や海岸の松原などのイメージが彼の新詩に現われ始めたのは博多に住むようになってからであり、[23] 留学時代の詩の特徴である。例えば、次のような作品がある。

まず、「晩歩（夕暮れの散歩）」（『女神』）という作品である。

松林呀！你怎麼這樣清新！
我同你住了半年，
從也不會看見，
這沙路兒這樣平平！

松林よ！どうしてこんなにすがすがしいのか！
私は君と半年間過ごしてきたか、
こんなのは一度も見たことがない、
この砂の道がこんなに平坦なのを！

兩乘拉貨的馬車從我面前經過，
倦了的兩個車夫有個唱歌。
他們那空車里戴的是些什麼？
海潮兒應聲著：平和！平和！

二台の荷馬車が通りすぎ、
くたびれた二人の車夫が歌を歌っている。
空の荷馬車に載せているのは何だろうか？
潮騒の「平和！平和」という声が響いている。

九州帝国大学留学生の郭沫若が見た「千代の松原」

この詩は「千代の松原」を散歩する郭沫若が砂浜と潮騒の穏やかさに感動を覚えたというものである。今日、九州大学周辺で荷馬車やそれを引く車夫は見られないが、この詩は当時の彼の眼前にあった光景を写している。他にも、「夜歩十里松原（夜、十里松原を歩く）」（『女神』）、「南風（南風）」、「石佛（石佛）」（以上『星空』）からも、松原が彼にとって身近な存在であったことが散見できる。

また、松原は時に郭沫若一家にとって恐怖感を与える存在でもあった。

遠遠只聽著海水的哭聲，　　遠くからただ悲しげな波の音が聞こえてきて、
黑魆魆的松林中也有風在啜泣。　　真っ暗闇の松原にも、風がヒューヒューと吹きぬける。
兒子不住的咿咿啞啞地哀啼……　　息子はずっとピーピーと泣きじゃくっている……
兒子抱在我手里，　　息子を私の腕の中にぎゅっと握りしめると、
眼淚抱在我眼里。　　私の眼の中も涙でいっぱいになった。　「暗夜（暗い夜）」（『星空』）

しかし、眼前の情景が写実的であること、松原が彼の生活の一部分をなしていたことは前詩と何ら変わりない。

更に「輟了課的第一點鐘里（休講となった一時間目）」其二（『女神』）では、休講を知った郭沫若が松原に散歩に行く。

我跑到松林里來散步，　　松林まで散歩に来ると、
頭上沐著朝陽，　　頭の上から朝日が降り注いだ。
腳下濯著清露，　　朝露が私の足元を洗い、
冷暖温涼，　　つめたさとあたたかさ、
一樣是自然生趣！　　どちらも自然の快楽そのものなのだ。

当時の郭沫若には、松原や博多湾が「憩い」「癒し」の空間であり、松原とともに生活していたかのようである。

松原は社会批判や自己の苦悩を吐露する詩の中にも登場する。「浴海（海水浴）」（『女神』）や「冬景（冬景色）」（以上『星空』）はその最たるものである。[24]

そのほかにも、同時期の作品で松原を詠った旧詩がある。

松原十里負兒行　耳畔松聲并海聲　　松原十里　児を負ひて行く、耳畔に松声　并びに海声あり。

我自昂頭向天笑　天星笑我歩難成　　我自ら頭を昂げ（もた）　天に向かひて笑へば、天星　我が歩　成り難きを笑ふ。

「十里松原」其一（「創造十年」、のちに『潮汐集』に収録）

この詩も眼前の様子を詠ったものであり、詩体こそ異なるが、内容的には一連の新詩の延長線上にあるものである。

以上、松原を題材にした九州帝国大学時代の郭沫若の詩作を見てきた。これらから、松原と博多湾が彼の文学の重要な背景を成していることは明らかである。内容は、目前の光景を映し出したもの、一歩踏み込んで社会批判や苦悩を内在させたものと多岐にわたっているが、当時の郭沫若はあらゆる事象をタイムリーな新詩によって表現するいわば「実験的詩作」を試みていた傾向にあると考えられる。

おわりに

これまで、郭沫若が「千代の松原」を詠った旧詩と新詩を見てきた。その結果、以下の結論が導き出せる。

①一九二〇年代頃（九州帝国大学留学生時代）から一九五五年（訪日科学代表団団長としての福岡訪問）のわずか三十数年の間に、「千代の松原」を含む大学周辺の光景に大きな変化が見られること。（詳細は本稿末尾の〔図版3〕参照）

②郭沫若が見た松原は、「生活者が見た松原」と「旅人が見た松原」とにそれぞれ分けられること。

③九州帝国大学留学中の詩は、詩人（私人）としての創作であり、その中において自己に内在するものを表現している。したがって、その中にたとえ社会批判等が含まれていても、個人のレベルのものに過ぎない。一方、一九五五年の旧詩も自己に内在するものを表現しているが、それ以上に政治家（公人）が中央政府の本音を代弁するという要素が強いこと。つまり、内容が往々にして個人のレベルではおさまっていない。

九州大学周辺の光景に変化が見られることは、福岡の都市化と密接な関係がある。現在、箱崎海岸は完全に埋め立てられ、当時の海岸線を知る人物も少なくなった。また、海岸部には福岡都市高速道路が走り、昼間は箱崎上空を旅客機が引っ切り無しに往来している。その反面、「千代の松原」はほとんど姿を消し、九大医学部構内にある千利休が豊臣秀吉に茶を献じたという「釜掛の松」はその遺跡のひとつである。郭沫若が今日の大学周辺の変化を

目の当たりにしたら、さぞかし心を痛めることだろう。

また、郭沫若が見た松原を「生活者が見た松原」「旅人が見た松原」と分類できることは、留学生（長期滞在者）、政治家（短期滞在者）という立場の違いに起因する。つまり、同じ松原を目にしても、立場が異なれば見え方も異なり、ひいては何故そこに政治性を含ませたかという重要な問題につながる。特に、訪日科学代表団団長として訪日した彼は、同時に中国を代表する政治家という看板・責務も背負っていた。だから、軽はずみの言動は許されなかったが、そのような状況下で「公（オフィシャル）」と「私（プライベート）」の思いの全てを「弔」に込めた詩文を作り上げたのである。「訪日雑詠」はその後、『北京日報』（一九五六年二月二十九日）に掲載された。これらの政治批判は直接、日米両政府に向けられたという要素も否定できないわけではないが、同紙の性格からして、むしろ外交問題に携わる後輩政治家に対する教訓としての要素も強かったのではないかと考えられる。

注

（1）「千代の松原」は、かつて石堂橋（福岡市博多区千代二丁目）から筥崎宮にかけて広がっていた松原で、十里松原や箱崎松原とも呼ばれていた。渡邊篤三郎編『福岡市案内記』（九州商報社、一九一〇年）、福岡県『再修 福岡縣名勝人物誌』（福岡県、一九二二年）に詳細な紹介がある。また、『箱崎記』、『續日本紀』、連歌、『筑紫道記』、『筑前国續風土記』等にも記述が見られる。廣渡正利著『筥崎宮史』（文献出版、一九九九年）、宮崎克則・福岡アーカイブ研究会編『古地図の中の福岡・博多 一八〇〇年頃の町並み』（海鳥社、二〇〇五年）、大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市・博多を掘る』（海鳥社、二〇〇八年）に詳しい。

（2）郭沫若と九州大学については、岩佐昌璋監修リーフレット「郭沫若と九州大学」（九州大学国際交流推進室、二〇〇八年七月）を参照。また、彼の九州帝国大学留学に関しては、武継平著『異文化のなかの郭沫若 ―― 日本留学の時代 ――』（九州大学出版会、二〇〇二年）に詳しい。

（3）原文は「有一天中午，我很早吃了午飯，爲逃避午後所易起的慵倦和睡意，我跑出寓所來，在松林里面散歩。正走到

箱崎神社前的甬道上，無心之間我遇著由海岸上走來的張資平。（ある日の昼ごろ、私は早めに昼食をすませると、午後になるとよく襲ってくる気だるさと眠気を避けるため、うちを出て、松林を散歩していた。ちょうど筥崎宮の前の石畳の小道まで来ると、ばったり海岸の方からやって来る張資平に会った。）」とある。小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝 二』（東洋文庫一二六、平凡社、一九六八年）を適宜参照。なお、本論文に引用した郭沫若の詩文は、原則として『沫若文集』（人民文学出版社、一九五七―一九六三年）を使用した。

（4）「創造十年」にも「市東盡頭處有一帶大松原，沿著海灣就和圍牆一樣，怕有五六里遠。日本人稱爲〝千代松原〟，在古書上又稱爲〝十里松原〟。（福岡市の東はずれは広い松原になっていた。湾に沿って塀のように五、六里の長さがあったろうか。日本人は「千代の松原」と呼ぶが、古書では「十里松原」とも呼ばれている。）」とある。

（5）唐明中・黄高斌編注『櫻花書簡』（四川人民出版社、一九八一年）一四九頁。大高順雄・藤田梨那・武継平訳『桜花書簡 中国人留学生が見た大正時代』（東京図書出版会、二〇〇五年）に邦訳があり、適宜参照した。

（6）黄淳浩編『郭沫若書信集(上)』（中国社会科学出版社、一九九二年）二〇一頁。

（7）「訪日科学代表団」という名称決定に関して、谷輔林・唐燕能著『郭沫若和他的日本妻子』（学林出版社、一九九九年）三一六―三一七頁に、「〝用什麼名義去？ 要好好考慮一下嘍。〟朱老總提出了問題。周恩來以商議的口氣説：〝人家是以日本學術會議的名義邀請的，我看，我們就以中國訪日科學代表團的名義去好了。〟〝好！ 郭沫若就是這個團的團長！〟毛澤東高興地拍了板。（「どんな名称で行きますか？ しっかり考えなければなりませんよ。」と朱徳は問題を発した。周恩来は「彼らは日本学術会議という機関から招待されて行くのであり、我々は中国訪日科学代表団という名前で行くのがいいかと思います。」と協議するような口調で言った。そこで、毛沢東は「よし！ 郭沫若がこの団体の団長だ！」と機嫌よく断を下した。）」とある。

（8）『九大醫報』二五―三（一九五五年十二月）参照。

（9）『人民日報』一九五四年十二月三十日「論日本和中國恢復正常關係」、一九五五年二月二十六日「日本人民面臨著兩條道路」の記事参照。

（10）当時の民間外交に関しては、王仲全・孫煥林・趙自瑞・紀朝欽著『當代中日民間友好交流』（世界知識出版社、二

〇〇八年）参照。

（11）一行の訪日の様子は、逐一『人民日報』に掲載されている。また、扱いこそ異なるが、日本の各社新聞紙面でも報道され、当時の人々の関心の高さがうかがえる。

（12）一九五一年九月四日「一封給日本人民的公開信」、一九五二年九月五日「爲亞洲及太平洋區域和平會議的召開第二次給日本人民一封公開信」、一九六〇年一月二十二日「郭沫若致日本人民公開信」参照。

（13）黄淳浩編『郭沫若書信集（下）』（中国社会科学出版社、一九九二年）二一九頁。

（14）江頭光著『ふてえがってえ 福岡意外史』（西日本新聞社、一九八〇年）一五三頁参照。また、同書によると、松の立ち枯れは松原を駆け抜ける列車や工場の煤煙、竈の焚き付けに使う枯れた松葉の掻き取りすぎ、博多湾築港工事等、複数の要因が重なって発生したとある。

（15）例えば、「別須和田」や「歸途在東海道車中」には政治性を含ませた表現が目立つ。前者に関しては、藤田梨那「日本郭沫若舊居今昔――我的外祖父亡命生活的紀念碑」（『香港作家』二〇〇七年一月号）を参照。

（16）郭沫若が密かに家族のいる須和田をあとにして、抗日戦争に身を投じる決意をしたのは、一九三七年七月二十五日である。この方面に関しては、武継平「郭沫若に対する警察監視の実態――『日支人民戦線派諜報網』の検挙から――」（『野草』第七七号、二〇〇六年二月）に詳しい。

（17）オネスト・ジョンとは、アメリカ初の核弾頭搭載地対地ロケット弾を指す。アメリカは一九五五年八月から在日米軍に配備を進め、同年十二月二十一日に三度目の試射がなされた。なお、当日は郭沫若一行の日本滞在中である。

（18）『説文解字』八篇上。

（19）郭沫若が中山平次郎宅を訪問したのは、一九五五年十二月十九日である。色紙に関して研究調査をする中で、宮本一夫九州大学大学院人文科学研究院教授のご配慮をいただいた。心から感謝の意を表したい。

（20）郭沫若の中山平次郎宅訪問に関しては、劉徳有著、村山孚訳『郭沫若・日本の旅』（サイマル出版会、一九九二年）に詳しい。なお、原著は『随郭沫若戦後訪日 回憶与紀実』（遼寧人民出版社、一九八八年）であるが、未見。色紙に関する詳細は不詳。

（21）「追懐博多」（一九四二年十二月六日）（『沸羹集』）参照。

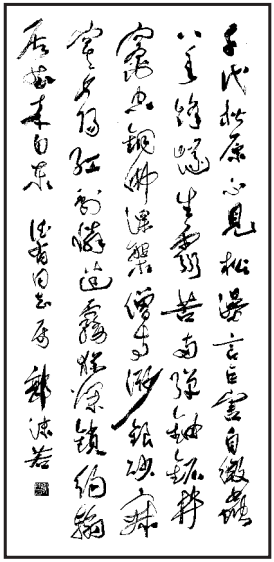
（22）前掲注「追懐博多」参照。また「学内講演会」（一九五五年十二月十七日、九州大学医学部中央講堂）でも、博多と日中交流の関係から九州大学を選択した理由が述べられている。講演録は『九州大学新聞』（同年十二月二十五日）に収録。

（23）前掲注、武継平著『異文化のなかの郭沫若――日本留学の時代――』一四九頁参照。

（24）岩佐昌璋「郭沫若の博多――海と松原」（『西日本文化』四三一号、二〇〇八年三月）参照。

（附記）本論文は、「郭沫若九大留学九十周年記念 郭沫若研究国際学術集会」（於 九州大学医学部、二〇〇八年九月一日）において、「留学生・中国科学院院長 郭沫若眼中的福岡・博多」と題して口頭発表した原稿をもとにしたものである。日本郭沫若研究会岩佐昌璋会長、藤田梨那同会副会長に衷心よりお礼を申し上げたい。

【図版1】郭沫若が劉徳有氏に贈った書（一九六〇年代）



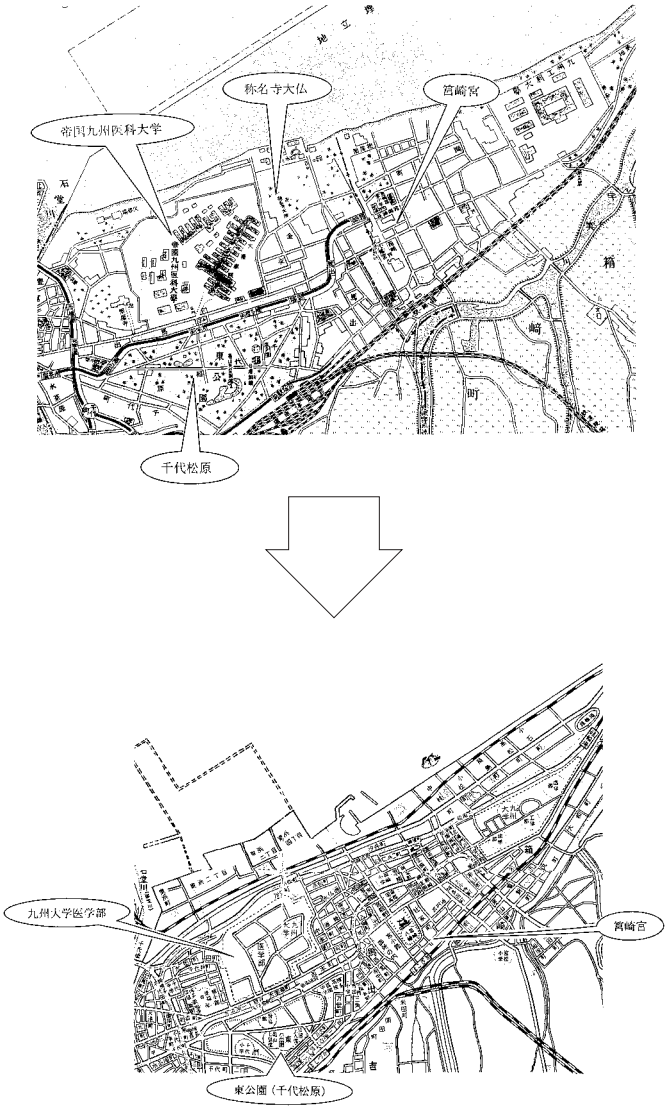
《郭沫若書法集》編委会編『郭沫若書法集』（四川辞書出版社、一九九九年）より転載

【図版2】郭沫若が中山平次郎に贈った色紙（一九五五年十二月）

九州大学文学部考古学研究室蔵

九州帝国大学留学生の郭沫若が見た「千代の松原」

【図版3】一九二〇年と一九五五年頃の「千代の松原」、箱崎周辺地図（地図中の吹き出しは筆者）



※上図は大淵善吉編『帝国都会地図　九』（駸々堂旅行案内部、一九二〇年）、下図は『福岡市街全図』（同潤社、一九五八年）による。